刺客は英雄たりうるか

――張藝謀『英雄』試論――

森　田　浩　一

Could the assassins be heroes?

―― An essay on the movie "Hero" directed by Zhang YiMou ――

MORITA Kouichi

Abstract：The movie named "Hero" directed by Zhang YiMou is an amusement work. Its story is about an assassination attempt of QinWang (QinShihuangdi) and it can be considered as a variation on the traditional "wuxia" movies, but actually this movie's perspective on "wuxia" is quite modern and diferent from the one which people of Qin-Han dynasties had.

要旨：映画『英雄』(張藝謀監督作品) は，ハリウッド映画のような，中国のスターたちを起用した長編娯楽作品である。この作品は秦王（のちの秦始皇帝）暗殺を素材にした武侠映画といってよいものであるが，実際の，有名な荊軻が秦王暗殺に失敗した話をはじめとする，当時の「侠」のありかたとは違った，ひじょうに現代的な価値観から物語は描かれている。

張藝謀（チャン・イーモウ）監督作品の『英雄』(邦題『Hero』) は，2002年に中国で公開され，大好評をもって迎えられた。日本では翌年，アメリカではさらにその翌年に公開され，いずれの地でも多くの観客を動員する人気作品となった。

この映画の前，しばらくの間，張藝謀はいわゆる「幸福の三部作」と呼ばれる作品を続けて発表していた[1]。それらは，現在の中国のどこかに赴けば出会うことが出来る，そんな普通の人々を主人公にした作品であった。しかし，多藝多才な張藝謀は，この『英雄』において路線を転換し，長編の娯楽作品を作り上げたのだった。

出演者には，李連傑（ジェット・リー），梁朝偉（トニー・レオン），張曼玉（マギー・チャン）といった豪華キャストを配し，撮影はクリストファー・ドイル（杜可風），衣装はワダエミが担当，CG もふんだんに取り入れた映像美で，ハリウッドにも通用する娯楽大作となった。

物語は，無名という名の亭長（下級役人）と秦王政（後の秦始皇帝）との会話を軸に展開する。

かつて秦王は，残剣と飛雪という二人の刺客が宮殿深くにまで侵入するのを許し，危ういところを逃れた。無名は，長空という，これも秦王を狙う刺客を片付け，さらに残剣と飛雪の二人も討ちとった。秦王は，かれら刺客を仕留めたものに対しての褒賞を布令ており，秦王の御前で十歩の距離に座を賜り，秦王と対飲するという褒美のために，無名は秦王の前に呼び出される。映画は，そこでの秦王の問いに答えての無名の語りで始まる。

無名が最初に語った物語は，刺客たちの間にある愛憎を利用して，かれらを討ち取ったというもの。しかし，秦王はそれを信じない。かつて宮殿内にまで踏み込んできた残剣と切り結んだなかで，秦王は残剣が，無名が語るような愛憎に振り回される人物ではないと見抜いていたからだ。秦王は，無名がある一人の人物を見損なっている，その一人とは自分だと告げる。

そして今度は秦王が無名の話した物語を再構成する。それは，ただ一度きりの邂逅で感じとった，残剣のな

かの「英雄」的な人間性にもとづいて，無名の話のなかのウソを捉えていくことで，本当の物語を紡ぎ出す作業だった。そして，秦王は，無名こそが他の刺客たちの犠牲と協力のもとで，最終的に自分の前にやってきた刺客であることを見抜く。無名は十歩の距離の中では必殺の剣法（十歩一殺剣）を身につけており，秦王に近づくために，残剣たちにかけられた褒賞を利用し，また，残剣たちも喜んで無名に協力したのだと。

しかし，話はさらに続く。秦王の推測もまだ当たっていないところがあった。今度は，無名が秦王に指摘する，大王はある人物を見損なっていると。その人物とは残剣であった。残剣，飛雪，そして残剣の侍女如月すべてが高潔な「英雄」たる人物であったという本当の物語を，無名は秦王に語るが，秦王にとって意外だったのは，残剣が天下のために秦王暗殺を思いとどまり，さらには無名にも暗殺を思いとどまるように勧めたということだった。そして，無名は，残剣の勧め通り，秦王の暗殺を思いとどまり，衛兵たちが放つ矢で射殺されるのである。

秦王がかつて残剣を見抜いたように，残剣も同時に秦王の「英雄」たるものを見抜いており，そして，無名もまた秦王の前で秦王の「英雄」たることを知った。そして，またもや同様に秦王も無名の「英雄」たることを知り，かれを手厚く葬るのである。

さて，以上のように簡単にあらすじを述べてみたが，映画の細かな筋立ては置き，映画のタイトルでもある「英雄」ということばを鍵にしてのまとめであった。刺客たちと秦王が互いに相手を「英雄」と認める（飛雪は最後まで秦王暗殺をあきらめず，残剣を殺してしまうことにはなるが）という解釈によったものである。この映画のタイトル『英雄』は，観客に，いったい誰が英雄なのかということを問いかけているが，監督そしてスタッフの発言や，映画の主要な登場人物を演じるのがすべて大スターであることを考えれば，すべての登場人物が英雄であるとしているかのようである。

この映画は張藝謀にとっては初めての武侠映画である。武侠映画とは，武侠小説に対応する映像作品だ。小説にしても映画にしても，武侠は中国という文化圏では大衆に人気があるテーマである。

武侠とは，字のごとく，武すなわち武藝を身につけ，侠すなわち，正義・義理・人情といったことばで表される価値観を重んじた生き方を踏み，己の生命よりも義を重んじる，そんな人物のことである。武侠小説・映画の中では，このような登場人物が，弱きを助け強きをくじき，時には自らを犠牲にしても他人の難に赴く。そして，映画の中では，香港のカンフー映画に特徴がはっきり表れるように，主人公は超人的な武藝を身につけており，極めた武藝によって，時には空を翔け，時には水の上を跳ね歩くことすら可能とする。張藝謀の『英雄』も例外ではない。さらには，この『英雄』という技術革新を経た映画の中で，武すなわち武藝の要素は，CGやワイヤーアクションなどの新しい特殊技術を使って活写される。かつて小説の世界の中では読者の想像力の内にあった情景を，映画は実に美しく映像化することに成功していると言える。

さて，それではそのような映像技術によっては誇張して描くことができない，侠という要素についてはどうであろうか。無名・長空・残剣・飛雪という四人の剣客は，実に典型的な武侠として描かれているように見える。かれらはお互いを「大侠」と呼ぶが，これは侠の世界における尊称である。かれらは先に述べた侠の価値観を見事に身につけた人々であるように見える。しかし，映画を見終わってひっかかるのは，果たして彼らが侠であったとして，かれらがよって立つ義とは何かということだ。それなしでは，かれらは決して英雄と呼ばれるに値することはないのだ。

監督は，インタビューなどで，この作品が幼い頃に接した，李白の「侠客行」に影響を受けていると述べている[2]。李白のうたは以下のようなものである[3]。

趙客縵胡纓　趙客　縵胡の纓
呉鉤霜雪明　呉鉤　霜雪のごとく明かなり
銀鞍照白馬　銀鞍は白馬に照り
颯沓如流星　颯沓として流星の如し
十歩殺一人　十歩に一人を殺し
千里不留行　千里行を留めず
事了払衣去　事了るや衣を払って去り
深蔵身与名　深く身と名とを蔵す
閑過信陵飲　閑に信陵を過りて飲み
脱剣膝前横　剣を脱して膝前に横たう
将炙啖朱亥　炙を将て朱亥に啖わせ
持觴勧侯嬴　觴を持して侯嬴に勧む
三杯吐然諾　三杯然諾を吐き
五岳倒為軽　五岳倒て軽しと為す
眼花耳熱後　眼花し耳熱するの後
意気素霓生　意気素霓生ず
救趙揮金槌　趙を救いて金槌を揮い
邯鄲先震驚　邯鄲先ず震驚す

千秋二壮士　千秋なり二壮士
烜赫大梁城　烜赫たり大梁城
縦死侠骨香　縦い死すとも侠骨香り
不慙世上英　世上の英たるに慙じず
誰能書閣下　誰か能く書閣の下
白首太玄経　太玄経に白首せん

一読して，「十歩殺一人」の一句から，監督が主人公無名の十歩一殺という剣法を思いついたのだとわかるが，それはさておき，李白がうたう侠客とはどういう人物なのだろうか。

このうたに登場する侠客は，侯嬴や朱亥と並べられるような人物であるが，李白は侯嬴と朱亥の二人を千秋に名を残す「壮士」，立派なもののふと讃える。かれらは，戦国の四君子の一人と称される魏の公子，信陵君（魏無忌）が，秦の侵攻から趙を救った際に，生命を投げ打って信陵君を助けた男たちである[4]。侯嬴は隠士で貧しい暮らしをしており，大梁の夷門の門番をしていたが，信陵君に見込まれ，朱亥を信陵君に引き合わせ，そしてまた信陵君が将軍から軍をたばねる割り符を奪い，魏の軍隊を掌握する策を授けるという働きをし，最後は信陵君を送り出した後，自刎して果てる。朱亥は肉屋をしており，世に知るものはなかったが，侯嬴はその人物を見抜いており，信陵君が策略で手に入れた割り符を持ち，将軍晋鄙から軍隊の指揮権を奪い取ろうとするに当たって，疑念を抱いて従わない将軍を鉄槌で打ち殺し，信陵君を助けるのである。

信陵君には，有名な孟嘗君同様，多くの食客がいた。食客とは，侠客と似たもので，養ってもらった恩義に，主人火急の際にはわが命を重しとせず報いる存在である。しかし，この二人はいわゆる食客ではない。養ってもらってはいないが，まさに知己，己を理解してくれた人に感じて犠牲になるのを厭わず，相手の難に赴くのである。

司馬遷は『史記』遊侠列伝（巻一百二十四）のなかで，孟嘗君や信陵君は王族の一員だったため，その豊かな財力に物言わせて，すぐれた人物を食客として招いたが，そこに集まったものたちは，追い風に乗って叫ぶようなものであると，高い評価は与えない。一方，「閭巷の侠」，すなわち民間の侠に対しては，修行して名に磨きをかけ，その名声は天下に響いて，誉め讃えないものはいないと言う。信陵君一世一代の賭けにおいても，食客ではなく，閭巷の侠といってよい二人が大きな働きを上げたのであった。

さて話を戻して，映画『英雄』における侠とは，そしてその侠たるをささえる義とは何なのだろう。

主人公無名は，幼くして両親を亡くし，秦人に育てられたが，あるとき，実は自分が趙人であり，両親は秦の軍隊に殺されたことを知る。そしてそのときから十年の歳月をかけて十歩一殺剣を生み出す修行にうちこみ，秦王暗殺という復讐を誓う。かれの義は，父母の敵討ちである。

飛雪は趙の将軍の娘で，父を秦に殺され，その復讐に生きている。彼女の義は，父の敵討ちである。彼女にそれ以上の大きな義が存在していないことは，秦王暗殺成ったあかつきには，残剣と故郷に戻り，普通の一対の男女として暮らしたいという思いに端的に表れている。祖父と父が韓の五代の王に仕えた大臣であったために，秦に滅ぼされた韓のために復讐せんと，力士（大力の男）に鉄槌を持たせ，東巡する始皇帝を暗殺せんとして失敗するも，やがては兵をあげ，劉邦を補佐して漢の功臣となる留侯張良とは異なっている[5]。

そして，今一人，残剣は身よりもなく放浪しているときに飛雪と出会い，彼女と剣，そして剣と道が通じる書の修行をともにする。かれも趙人であるが，かれの義は愛する飛雪の敵討ちを助けるということにあろうか。

ただ，長空はいずこの人かわからず，秦王暗殺の動機も描かれない。しかし，かれも秦王が「身を捨てて義を取る」と讃えるように，何らかの義を背負っていたには違いないだろうが，詳しく語られぬ故，今は措く。

さて，李白が侠客行でうたった二人の侠客と，『英雄』中の大侠とを比較すれば，その相違点は「知己」ということにある。『英雄』の主人公たちには，秦王暗殺の動機に「知己」という要素が決定的に欠けている。残剣が飛雪の敵討ちを，身を捨てても助けようとするのは，愛情の故であって，「知己」に感じてのことではない。そして，かれらは皆，“讐恨”（うらみ）のために暗殺を行おうとする。信陵君の趙を救う大義の上に，その大義とは関わりなく，ただ己を知ってくれた信陵君のために身を捨ててかまわぬ朱亥ら二人とは，決定的に異なっている。

しかし，この映画の興味深い点は，秦王が残剣を知り，残剣を知己と認め，ついにはそれが無名をして暗殺をあきらめさせることに繋がる点である。残剣は書と剣の修行の内に，その最高の境地を悟りつつあり，飛雪とともに秦の宮殿に乱入し，秦王と刃を参える中で，その境地を悟る。そのため，かれは暗殺を思いと

どまったのであった。そして，十歩一殺という必殺技を携えた無名には「天下」という二字を送り，暗殺をあきらめさせようとする。

秦王と十歩の距離の中で相い対峙し語り合う中で，無名は秦王を「知」ってしまう。残剣の「剣」の字の書に，剣の最高の境地，「殺さずに平和を求めること」を悟った秦王に，ついにかれは暗殺をあきらめる。そして，秦王は刺客の残剣が知己であったことに感動して涙し，残剣を「大侠」と敬って呼ぶ。最後には，泣く泣く，今はさらにまた自分の「知己」となった無名を殺す命令を下さざるを得ず，無名は衛兵たちの放つ無数の矢に射殺されるのである。

愛し合う残剣と飛雪さえ互いを「知」ることはなく，残剣は飛雪の剣に死に，飛雪は自刃する結末に終る。この映画の刺客たちは，秦王暗殺のため，必殺剣を身につけた無名の前に生命を捧げたり捧げようとしたりするが，かれらを貫く大義である暗殺は，私怨のレベルにとどまっているといっても過言ではあるまい。

ただ，秦王という英雄を軸として，残剣は秦王を理解し，無名も残剣そして秦王を理解する。暗殺者がその標的を「知」ってしまうという，暗殺者にとっての悲劇，結局はそれが残剣と無名を英雄たらしめているかに見える。

この映画で最終的に「義」とされるものは，「天下」である。秦王が天下を統一すれば，戦国の世は終わり，平和がもたらされる。もしも無名が秦王を暗殺すれば，戦いはさらに続き，民の苦しみは長引く。残剣は「殺さずに平和を求める」最高の境地を得て，この義を知り，秦王暗殺を放棄し，さらには飛雪にも無名にも同じく放棄を求める。この天下という義は，すなわち公の義となり，かれらの私の義であった怨みを晴らすということは捨てられてしまう。私を捨てて，天下という公の義を取ったということ，これがかれらを英雄たらしめているのだと，映画は語りかけている。

しかし，これは実に現代的な価値観に基づいたものであると言えるだろう。戦国時代の「国」とは，もちろん現在の国民国家としての国とは違うものであった。国を愛したり，敵国を悪むということのあり方も，現在のそれとは異なっている。中国と総称される地域は，戦国時代には大きく七つの国が並立し，その将来秦始皇帝によって統一されることになる文字や度量衡などの様々な制度において，それぞれが独自のものを持っていたが，大きく見れば，やはり一つの文化圏であった。だから，才能ある者は，自国他国を問わず，自分を重用してくれる国に仕えた。

そして，個人のあり方もまた違っていた。張藝謀は映画の冒頭で，この物語は数ある始皇帝暗殺の伝説の一つであると字幕によって語る。しかし，先に引いた司馬遷の『史記』に残される始皇帝暗殺の伝承には，秦に両親を殺されたゆえに秦王暗殺を企てる無名のような，きわめて個人的な復讐劇は存在していない。個人が国に怨みを持ち，それを個人的に晴らそうとする，しかも一気にその君主を暗殺することで晴らそうとするという筋立ては，きわめて現代的なお話なのである。

たとえば，これも先に引いた張良が企てた始皇帝暗殺。かれは亡国韓の功臣の末裔であったがゆえに暗殺を企て，力士（力持ちの男）を用いた。刺客は力士であるが，力士は秦と個人的なしがらみを持つわけではない。力士は，張良がつてを頼って用いた男で，かれが生命を顧みずに張良を助けようとしたのは，おそらく張良とつてのあった人間と自分の間に存在する信義の関係――侠――のためであったろう。

さて，司馬遷の『史記』に触れたなら，当然その刺客列伝（巻八十六）に話が及ばなければならない。この有名な列伝の最後に取り上げられ，しかも列伝の大きな割合を占めている人物は荊軻である。荊軻という刺客が秦王暗殺に失敗する故事は，非常に有名であるが，荊軻もかれ自身が秦に仇があるというわけではなく，燕の太子丹のために刺客として赴くのであり，荊軻と太子丹の間に存在する信義，自分を認めてくれた人間のためには生命も投げ出す侠という価値観が荊軻を動かしている。

刺客列伝は曹沫，専諸，豫譲，聶政，荊軻という五人の刺客の伝である。最初の曹沫が最も古く，荊軻が最も新しい。一人の伝記が終り，次の人物の伝記に移る時には，必ずその冒頭で「其の後何年たって」という時間経過が語られる。たとえば，二番目の人物専諸の伝記は，「其の後百六十有七年にして呉に専諸の事有り」と始まるがごとくである。つとに指摘されるように，これは，明らかにこれら五人の人物の上に，ある系譜を想定していることの証左に他ならない。その系譜の起点は曹沫で，最も司馬遷の時代に近い人物が荊軻というわけだ。

その系譜とは何か。もちろん，それは「刺客」という系譜である。刺客とは，時にテロリスト，時に暗殺者などと表現されることがある存在だが，刺客列伝の五人は，テロリストとか暗殺者とかと呼ぶのにためらわれるところがある。まさに，そのためらわれる理由が，刺客列伝の五人の刺客の特徴である。

刺客という人間のありかたとしての一典型，その源流として描かれる曹沫という人物から，その特徴を見ていこう。

曹沫は，魯の荘侯に仕えた将軍で，当時大国であった斉と三度戦い，そのたびに敗れたが，それでも荘侯はかれを将軍とし続けた。一方，荘侯は領地を差し出して，春秋の覇者の一人である，斉の桓公と講和しようとした。その講和の席上，曹沫は臣下の席から壇上に上り，匕首を手に桓公を脅し，魯の領土を返還するよう迫り，桓公は許諾する。その許諾を得て，曹沫はもとの席に平然と戻った。

桓公は怒り，講和を破棄しようとしたが，その名宰相管仲の進言を納れ，魯の領土を約束通り返還した。曹沫は，将軍としてふがいなくも三度も戦に負けたが，失った領土をこの刺客的な行為で，一挙に取り戻すことに成功したのである。ここに描かれている刺客とは，あくまでも自分を将軍とし続けてくれる荘侯，すなわち自分の主君であり，かつ「知己」である人物のために，己の生命を賭する人間である。

この曹沫と荊軻を結ぶことはたやすい。荊軻は，燕の太子である丹に，田光という人物を通して推薦され，上客としてもてなされる（この構造は，先の朱亥と侯嬴に似る）。そして，太子丹からの依頼を果たすべく，刺客として秦へ赴くのである。太子丹の依頼とは「もしも秦王を脅迫して，諸侯から奪い取ったすべての土地を返させ，曹沫の斉の桓公に対するはたらきのようにできれば，ひじょうに良い。もしもそれが実現できなかったなら，秦王を刺殺せよ（誠に秦王を劫すを得て，悉く諸侯の侵地を反さしめ，曹沫の斉の桓公に与けるが若くならしめば，則ち大いに善し。則(も)し不可ならば，因って之を刺殺せよ）」というものであり，荊軻は，そのいずれもが成らずに死ぬが，その最期に「失敗の原因は，秦王を生かしたまま脅迫し，必ず約束させて，太子に報いようとしたからだ（事の成らざりし所以の者は，生きながらにして之を劫かし，必ず約契を得て，以て太子に報ぜんと欲するを以てなり）」と語る。かれの第一の目的は秦王暗殺ではなく，あくまでもまずは曹沫が斉の桓公を脅かしたように，秦王を脅迫することで，秦王から秦が侵略した領地をそれぞれ諸侯のもとに返すという言葉を吐かせることにあったのである。ここに伺えるのは，テロリストとか暗殺者とかといった言葉で括りきれる人物では決してない。

張藝謀の映画に登場する刺客は，朱亥，張良の力士，そして『史記』刺客列伝の刺客たち，つまり，「知己」のために，「知己」になりかわって死を恐れず，「知己」の大義とするところのために刺客として赴く者達とは，まったく性格を異にする人物たちであると言える。映画の人物は，きわめて現代的な，個人の情念に動かされて秦王に復讐しようとする者達なのである。その刺客の性格の現代化が，刺客たちが秦王の知己となってしまうという映画を支えるおもしろみである逆説を成り立たせる。古の刺客たちには，この逆説が成り立つ余地がない。

そして，この現代化は，非常な単純化と表裏の関係になっている。古の刺客たちに，この映画のような「天下」は存在しない。かれらの義は，「知己」への恩義であり，それこそがかれらにとっての第一義であった。ところが，映画のなかの刺客たちは，個人の情動で動いているため，一挙に秦王と同じ立場で天下を論じることができてしまう。そしてかれらは，秦が中国を統一し，やがて漢以降に，時には分裂することはあっても，連綿と続く統一王朝の連環を経たのち，ようやく現代の「中国人」が身につけた，統一中国の「天下」に対する感覚によって，秦王の天下統一の「義」を認めてしまうのである。

さて，『英雄』と比較される映画に，荊軻の暗殺失敗を題材にした，陳凱歌監督『荊軻刺秦王』（邦題『始皇帝暗殺』）がある[6]。本論においても，『英雄』を考える上で，陳凱歌の作品も比較してみることにしよう。

張藝謀と同じく第五世代の監督と目される陳凱歌のこの映画は，『英雄』に先立ち，1998年に公開された。公開当時は評判がよくなく，『英雄』とは対照的に興行成績も芳しくなかった。その主な原因は，秦王政を演じた李雪健の，時に剽軽さに過ぎる演技などにあったが，『英雄』の陳道明演じる秦王のような，ステレオタイプ的な皇帝のイメージとは違い，人間としての弱さ・奇妙さを表現しようとした陳凱歌監督の演出は決して非難されるものではないだろう。

ともかく，始皇帝暗殺という同じ素材を扱った作品が，数年のうちに，同じ世代の監督と目され，とかく比較されがちな，この二人の監督から生み出されたことは興味深い。

さて，陳凱歌の作品は，刺客列伝の荊軻の故事を踏まえているが，『史記』などに描かれた話にはない要素を付け加えている。その主なもの二つを挙げる。

一つは，荊軻を元職業的殺し屋として設定していること。依頼を受けて刀鍛冶を殺しに向かい，全員を皆

殺しにするが，標的のうち，盲目の少女だけは，自分の顔が見えないので殺さずに去ろうとするも，少女は生き残って乞食になるよりはと自ら生命を絶つ。これが原因で，非情の殺し屋だったはずの荊軻は殺し屋稼業をやめることになる。

『史記』に描かれる荊軻は，読書と剣術を好む男であり，衛人として衛の元君に政策を進言したこともある人物である。決して職業的な殺し屋ではない。映画とはまったく異なっている。

二つ目は，趙姫という架空の人物を主人公として添えたこと。『史記』刺客列伝には，荊軻が秦へ携えてゆく匕首の持ち主として「趙の人徐夫人」という人物が見えている。映画の趙姫は，あるいはこの人物から着想されたものかもしれない。

この趙姫という人物は，秦王嬴政が趙に人質としてあったときからの幼なじみとして設定されている。二人はお互いに愛しあっており，秦王はいつの日か天下を統一したあかつきには，趙姫を皇后とするつもりでいる。一方，趙姫は秦に来て以来は，なぜか秦王を遠ざけていると描かれる。

さて，燕の太子丹は，かつては嬴政と同じように趙に人質としてあったが，今は秦に人質としてあずけられている。しかし，嬴政の自分に対する扱いに不満を抱いている。太子丹については『史記』などから離れるわけではない。

架空の人物趙姫が活躍するのは，ここからである。秦は燕に攻め込むための口実が欲しかった。趙姫は，秦王に不満を持つ太子丹を国に返せば，きっと刺客を送り込んでくるとふむ。そして，太子丹に疑われないようにするため，自分の顔にいれずみをいれ，秦から刑罰を受けたように装い，太子丹とともに燕へ赴く。そして，そこで荊軻を見いだし，太子は荊軻を刺客として秦に送り込むことになるのである。

趙姫は，秦王の，天下を統一し，この世から戦をなくし，民が平和に暮らせるようするという望みを聞き，それに心打たれ，その思いを実現させるべく，以上のような計を考えたのであった。しかし，秦が趙を攻め，そのこども達も情け容赦なく殺戮する様子を目の当たりにして，気持ちが変わる。いつしか，趙姫と荊軻の間に感情がめばえ，趙姫は本心から秦王暗殺を願うようになる。荊軻は史実の通り暗殺に失敗するが，趙姫は荊軻の遺体を引き取りに秦王の前に現れ，荊軻の子を身ごもっていることを告げる。

秦王が趙のこども達を殺したのは，将来の成長の後，復讐を企てることを恐れたからであったが，そのような秦王に対して，趙姫は荊軻との間の子どもは必ず生み育てると告げる。秦王はそれに対してなすすべもなく，ただ趙姫を見送るのみである。

この映画は，秦王の実の父とされる呂不韋のこと，そして秦王の母である太后と宦官と偽って太后と通じていた嫪毐のことなど，史書に記される故事を，多少アレンジを加えつつも，比較的忠実に描いている。しかし，上に挙げた二つの虚構が加わることによって，古来有名な刺客荊軻の故事はどう変質したのであろうか。

それは，『英雄』と同じく，刺客という存在の背景に，非常に個人的な感情を強く付加するということだろう。趙姫という女性を装置に使うことで，刺客を送るという行為の発端，そして理由を，秦王・趙姫・燕太子丹の愛憎という感情の中に押し込めることに映画は成功している。天下統一後の平和を語る秦王にとって，統一に到る道筋での平和主義，すなわち戦争放棄はまったく想定されてもいないし，約束もされていないにかかわらず，趙姫は祖国である趙が秦に侵略され，民が殺されるのを見て，秦王政への愛を憎に転換するが，これは極めてステレオタイプな，大局を見ず感情に振り回される女性像であると言ってよい。

そして最終的には，荊軻が刺客となることを承諾するのも，趙姫への愛に目覚め，盲目の少女の死に起因するショック状態から抜け出してのことであった。ここではもはや「侠」は影を潜めてしまっており，あるのは現代の我々にも理解しやすい「愛」だけである。映画の中の荊軻は，屈折した心理を抱えた元殺し屋で，劇中の誰に対しても侠としての恩義を感じてはいない。かれは，愛する女性のために，燕の太子丹の求めに応じ，秦王を殺しに行く。そして，その暗殺失敗は単に秦王殺害の失敗であって，秦王を脅し，秦が侵略した領地を諸侯のもとに返すという公義とはもはや関係がなくなってしまっているのだ。

陳凱歌『荊軻刺秦王』は，歴史の表舞台である史書には出てくることが難しい，個人の情念を描こうとした力作であると言える。司馬遷が『史記』刺客列伝なりの刺客像の典型として描いた荊軻の，あるいはあり得たかもしれないその人間性を，一人の架空の女性を劇中に置くことによって，創造したと言える。天真爛漫な面と冷酷な面，その他様々な矛盾を抱え込んだ秦王，小人の一面を強調された燕太子丹にしても，歴史を素材に想像をふくらませた興味深い人物像にできあがっている。なにより，刺客を送り込む計画の立案者

に秦王自身が絡んでいるというしかけは，なかなかに面白い設定であろう。こうしてできた物語は，史書と対立し，また補完しあってきた小説という伝統を背負っていると言ってよい。そもそも，時に無機質な記録に見える史書の記載に潜む，色々な人間模様を，小説は虚実の皮膜を自由に超えながら，語り続けてきたのだから。

そして，結局，趙姫という架空の一女性の情念に，歴史の表舞台に刻まれる秦王の天下統一への力強い野望は，当然のごとく打ち勝つのである。ただ，かれが一番恐れた復讐の火種としての荊軻の子供が，趙姫に宿ったというフィクションを映画ははらみつつも。

この映画をどれほど意識したかは不明だが，当然目にはしたであろう張藝謀の『英雄』は，より大胆に秦王と刺客という素材を用いた。ここに登場する刺客たちは，陳凱歌の荊軻以上に徹底的に史書のなかの刺客像を脱ぎ捨てる。陳凱歌が，趙姫という装置を使ってようやく成し遂げた，歴史の叙述に個人の情念を持ち込むという操作を，張藝謀は「伝説」という言葉ひとつで簡単に成し遂げる。たとえば，その簡単さは以下の対比にも明らかに現れる。陳の映画には，秦の趙攻略の戦闘場面が描かれ，その傷跡に趙姫が嘆き悲しむ様子が映し出されるが，張の映画では，戦闘の場面はない。ただ，趙国の書館にCGで描かれる無数の矢が降り注ぎ，超人的な技で矢を振り落とす無名と飛雪のアクションシーンが展開するのみなのだ。

残剣は天下を思い，秦王暗殺を思いとどまる。そこには趙姫のような個人的な怨みが立ち入ってはならない。だから，映画は，趙姫が秦王を見誤った自分を悔い，秦王を恨む原因となったような戦闘の情景は描かない。まるで，生身の兵隊の白刃に侵された怨みが，上空の戦闘機から降り注ぐ爆弾に殺戮されたときの，顔が見えない相手への怨みよりもずっと強いというかからくりを使うかのように，『英雄』という映画は秦軍の侵攻を，飛ぶ矢の，しかも大量に風のように飛来する現実離れした大群の矢の描写に閉じ込めてしまう。観客はこうして，残剣の「現実離れ」した理念に同意することができる。

映画『英雄』が，こうした単純化の果てに語っているのは，「天下」ということばの前に，秦王の六国侵攻と併合が正当化されるということである。やがて，秦王は中国を初めて統一し，始皇帝と名乗り，これ以降，中国は，中心に皇帝を戴く政治体制を二千年あまりにわたって続けてゆくことになる。

では，その二千年という時間の先端，つまりこれらの映画を生み出している現在という時間に存在している中国はどうであろうか。

清朝が倒れ，皇帝はいなくなった。袁世凱の皇帝になろうとする企ても成らなかった。しかし，共産党が治める中華人民共和国も，つい最近までは，皇帝のような存在である毛沢東が君臨する国家であったと言えないか。あるいは，一党独裁を捨てることができない共産党というものが皇帝のような存在であると，乱暴だが言ってしまってもよいのかもしれない。

こう考えるとき，張藝謀の映画が，今の観客に語りかけているのは，現在の中国が抱える様々な問題を超えて，中国が統一されている「天下」が何より大事なのだということなのかもしれない。2008年北京オリンピックの，開会式閉幕式の監督を張がつとめたこともまた，「天下」のためであったのだろうか。

荊軻をはじめとする刺客たちにしても，李白「侠客行」の侠客にしても，かれらは一種のアウトサイダーとして，「天下」とは対極的な場所で生き，ときには天下の悪として捉えられつつも，それでもなお，「世上の英」としての輝きを持った。刺客は英雄たりうるか。映画『英雄』の中で，いとも簡単に賛美される「天下」の前では，刺客たちは，演じるスター達の華こそあれ，たんに英雄としてまつりあげられているにすぎないのである。

参考文献

1　森田浩一「幸せという不幸－張藝謀の「幸福の三部作」について」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』第42号）参照。
2　たとえば，『英雄外伝』というタイトルで日本で発売されたDVD（発売元レントラックジャパン）の『チャン・イーモウと技術者編』の中のインタビュー。
3　字句は『李太白全集』（中華書局，1977）に拠った。
4　『史記』巻七十七魏公子列伝。
5　『史記』巻五十五留侯世家。
6　『刺秦』というタイトルでの縮尺版も存在している。